

中頓別町小頓別で捕獲された 2 個体のオナガアゲハについて

臼井 平¹, 岡崎 繁雄²

¹ オホーツクミュージアムえさし, ² 丹波屋旅館

Taira USUI¹, Shigeo OKAZAKI²

Two Records of Long Tail Spangle *Papilio macilentus* (Janson, 1877) from NAKATONBETSU Town, SHOTONBETSU, Northern Hokkaido, Japan

Abstract: Two specimens of Long Tail Spangle *Papilio macilentus* was collected from same place, NAKATONBETSU Town, SHOTONBETSU, Northern Hokkaido, Japan (44°49'40.3"N, 142°18'16.2"E, WGS84). One specimen (♂) was collected in August 15th, 2014, the other specimen (♂) was in August 20th, 2014.

¹ Okhotsk Museum Esashi, 1614-1 Mikasa-cho, Esashi-cho, Esashi-gun, Hokkaido 098-5823, Japan

² TANBA-YA, 91-1 Shotonbetsu, Nakatonbetsu-cho, Esashi-gun, Hokkaido 098-5102, Japan

キーワード: オナガアゲハ, 北海道, 中頓別町, 宗谷, 道北

Keyword: Long Tail Spangle, *Papilio macilentus*, Hokkaido, NAKATONBETSU

オナガアゲハ *Papilio macilentus* はアゲハチョウ属の一種で, 朝鮮半島中部以南から中国大陸中・西部に分布しており, 日本は分布の東限にあたりとされている。また, 毒を持つ別属のチョウ, ジャコウアゲハ *Byasa alcinous* に形態的な特徴をよく似せた, ベイツ型擬態をおこなっていることでも知られている (福田ら 1982)。幼虫期の食性としては, コクサギ, カラタチ, サンショウ, イヌザンショウ, カラスザンショウなどのミカン科の植物を食樹としている。

国内での主な分布域は, 冷温帯から暖温帯の間であるとされており, 九州から北海道南西部においては, 普通に見られる。通常, 本州以南にお

いては春型・夏型の年 2 回出現し, 北海道においても, 南西部においては 6 月中旬と 8 月上旬の 2 回出現するとされているが (藤岡 1972), 本種は本来, 温帯的性格の強い種であることから (福田ら 1982), 北海道北東部での確認例は極めて少なく, 1 年間に 2 回出現するかどうかは明らかになっていない (藤岡 1975)。

本報告では, 2014 年 8 月 15 日と 2014 年 8 月 20 日に, 北海道枝幸郡中頓別町小頓別の同所にて, 2 個体のオナガアゲハが採集されたので, ここに報告する。

北海道枝幸郡中頓別町小頓別 (44°49'40.3"N, 142°18'16.2"E, WGS84) にて, 筆者の一人であ

¹ 北海道枝幸郡枝幸町三笠町 1614-1, UsuiTaira@town.esashi.hokkaido.jp

² 北海道枝幸郡中頓別町字小頓別 91-1



Fig1. Specimens of Long Tail Spangle *Papilio macilentus*. 1 and 2 collected from NAKATONBETSU Town in August 15th, 2014(1, ♂, OMEI-104), and August 20th, 2014 (2, ♂, OMEI-105). A: Dorsal view B: Ventral view

岡崎が2014年8月15日に♂1個体（オホーツクミュージアムえさし収蔵 資料番号：OMEI-104），2014年8月20日に♂1個体（資料番号：OMEI-105）を採集した。

オナガアゲハは、これまで北海道北東部での採集記録は殆ど無く、偶発的に他所より飛来してきた可能性も考えられるが、本種の飛翔能力が低いことを記した文献もあるため（白水 1965），採集された地点の付近で生まれた個体の可能性もある。近年の気象変動などの影響により、分布域が徐々に北上している可能性もあるため、今後、道北地域において、オナガアゲハの食樹となりうる

ツルシキミ等のミカン科の樹木の有無や、卵、幼虫などの調査を行なっていき、本種の情報を蓄積していく必要があるだろう。

引用文献

藤岡知夫．1972．図説日本の蝶．P11．初版．ニュー・サイエンス社．
 藤岡知夫．1975．日本産蝶類大図鑑．P52．第1版．講談社．
 白水隆．1965．原色圖鑑日本の蝶．P7．初版．北隆館．
 福田晴夫，浜栄一，葛谷健，高橋昭，高橋真弓，

田中蕃, 田中洋, 若林守男, 渡辺康之. 1982.
原色日本蝶類生態図鑑(I). P118 - 119. 初版.
保育社.